平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

ふりがな	ほっかいどうきょういくだいがくふぞくはこだてちゅうがっこう
学校名	北海道教育大学附属函館中学校

校 長 名：相　田　幸　男

所 在 地：北海道函館市美原３丁目４８番６

電話番号： 0138-46-2233

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	美術

≪研究主題≫

【学校研究主題】

新学習指導要領の趣旨を実現する教育の展開

【教科研究主題】

豊かな感性と創造性を身につけ，自己実現できる生徒の育成～我が国の美術や伝統と文化に関する学習指導の工夫～

【研究の要点】

「我が国の美術や伝統と文化」に着目した学習指導について〔共通事項〕を基軸に，表現と鑑賞との関連を図るなどの題材構成及び学習指導を工夫することによって，生徒の様相の変化及び記述内容からも「我が国の美術や伝統と文化」に対する生徒の意識に変化が見られ，我が国の美術文化に対する理解を深めること，我が国の伝統や文化を尊重する態度を育てることができた。また，言語活動を充実する観点から美術科の学習に即した言語に関する能力の習得と活用を図るとともに，生徒自身が試行錯誤しながら感受し，思考・判断し，表現するといった一連の学習過程を重視することにより，主体的に学習に取り組み，豊かに表現したり自分なりに価値を判断したりする力を育てることができた。課題としては，興味や関心を今後も継続させ，さらに，知識の面だけではなく美意識の面を同時に育んでいくことが必要であると考える。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

・通学区域が広く，各地域との関係はやや疎遠である。

・保護者の多くは教育熱心で学校に対して協力的である。

・研究推進校としての附属学校の役割を担うために，全教員が地域の教科サークル等に所属して，助言や研鑽に努めている。

２　学校の概要（平成22年4月5日現在）

	1年	2年	3年	計
学級数	3	3	3	9
生徒数	117	123	117	357

教員数　１８　名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

(1) 研究主題

【学校研究主題】

新学習指導要領の趣旨を実現する教育の展開

【教科研究主題】

豊かな感性と創造性を身につけ，自己実現できる生徒の育成～我が国の美術や伝統と文化に関する学習指導の工夫～

(2) 研究主題設定の理由

・教育基本法や教育３法の改正，及び学習指導要領の改訂に対応した教育活動を展開するため。

・本校生徒の「生きる力」を育成するため。

・生徒一人一人が身に付けるべき資質や能力の育成に重点をおき，生徒の主体的で創造的な課題探求の場面を設定することが重要であると考えたため。

・我が国の美術文化についての理解を深め，日本人としての自覚と我が国の美術や伝統と文化を尊重する態度を育てることを視点としたため。

(3) 取組体制

本校研究部

（副校長・研究部長・複数の研究部員で構成）

↓

研究協議会（定例・本校全教員で構成）

↓・渡島教育局，函館市及び渡島の公立中学校との連携

校内授業研究会（本校にて全教科実施）

↓・北海道教育大学との共同研究

教科研究紀要の作成と教育研究大会の実施

・日常の授業実践例の提示

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	我が国の美術や伝統と文化に関する学習指導の工夫の中で，年間指導計画の見直し，題材開発，学習活動の工夫を検討してきた。年間指導計画の見直しは，これまでの計画の中に，我が国の美術や伝統と文化に関する内容を充実させるため，各学年における題材の配列を見直し，発達段階や系統性を考慮しながら，３年間の学習で繰り返し意識を喚起させ，学習内容が定着していくことをねらった。また，題材開発では７つの題材を新たに設定した。各題材は，これまでの題材を踏襲しつつ展開の仕方を再構築したものや鑑賞の扱い方を工夫した学習活動を試案した。そして，学習活動の工夫では言語活動とその効果に着目し検証を進めた。
平成22年度	試案した年間指導計画をもとに，各学年の授業総時数を考慮し「表現」や「鑑賞」の授業形態のさらなる工夫を行った。そこで，４期にわたる生徒と教師によるカリキュラム評価を行いながら，生徒の実態や題材の達成状況を考慮しながら指導内容の見直しや指導方法の改善を行った。また，今年度は，第２学年から第３学年への題材の接続を意識した授業の実践を中心に指導と評価を効果的に結びつけるため，生徒の自己評価力を高める授業構想を意識した。さらに，第１学年では我が国の美術や伝統と文化に対する興味や関心を高める題材の開発を進めた。

２　研究内容及び具体的な研究活動

（１）　我が国の美術や伝統と文化に関する学習指導の工夫

〈３年間を見通した指導の工夫〉

①　研究の重点

年間指導計画の見直し

これまでの年間指導計画の中に，我が国の美術や伝統と文化に関する内容を充実させるため，各学年における題材の配列を，学習の系統性を工夫し，見直した。

題材開発

７つの題材を新たに設定した。各題材は，これまでの題材を踏襲しつつ展開の仕方を再構築したものや鑑賞の扱い方を工夫した学習活動を試案した。

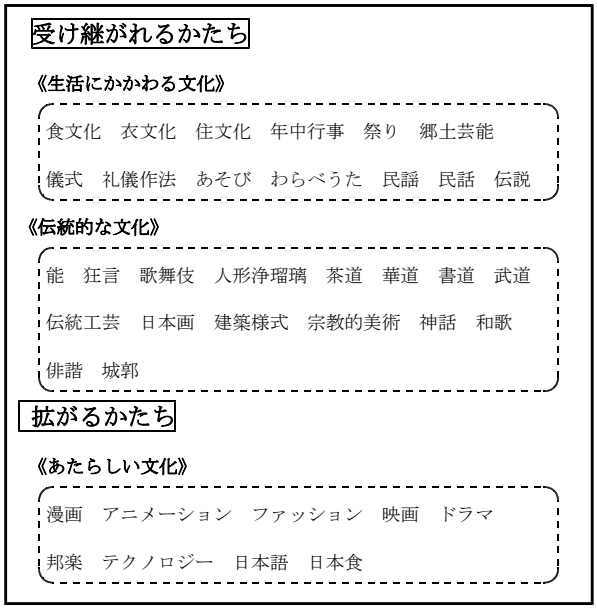
授業構想の工夫

指導と評価を効果的に結びつけるため，生徒の自己評価力を高める授業構想を意識した。

②　具体的な取組

○年間指導計画の見直し

我が国の美術や伝統と文化を《受け継がれるかたち》:（生活にかかわる文化）（伝統的な文化）と《拡がるかたち》:（あたらしい文化）とに大別し，段階を踏みながら３年間の学習で繰り返し意識を喚起させ，学習内容が定着していくことを意識した。



我が国の美術や伝統と文化を整理

○題材開発

子どもたちに「わかる」や「できる」を実感させることで関心や意欲の高まりを期待し教材開発を行った。具体的には

・身近に感じられるテーマ

・比較による違いや類似に気づかせる鑑賞の指導

・本物との出会い

・驚きや発見をさせる提示

・思考の広がりができる題材

など興味・関心や知的好奇心を持たせる教材やその指導方法の工夫を意識的にした。そこで，我が国の美術や伝統と文化をできるだけ身近な内容の学習からはじめ，よさや美しさ，精神性の高さという魅力を伝えることができるよう心がけた。「生活に関わる文化」を学習の切り口として教材開発を行い，広げて，「伝統的な文化」を感受させ，深めて，「あたらしい文化」を創造させる一連の流れをイメージした。

各題材は，鑑賞の扱い方を工夫することで，これまでの指導計画を，どんなねらいやどのような指導の展開をするかという視点で見直した。そのアプローチの仕方は，「鑑賞」，「鑑賞＋表現」，「新しい題材」として，これまでの題材を踏襲しつつ展開の工夫を考慮した。題材の展開には年４回のカリキュラム評価を行いながら，生徒の実態や題材のねらいの達成状況を考慮しながら，指導内容の見直しや指導方法の改善を行った。たとえば，《第３学年　うつろい「いのりのかたち」》では当初の計画では粘土による塑造の制作をイメージしてきたが，扱う素材を木材に変更し，木のもつ風合いや質感から日本文化の素材を生かす繊細でかつ大胆な表現を感受させたいと考えた。また，木材の加工にはのこぎりやのみといった道具を使用するため，技術科での木工に関する既習内容の確認と授業等での連携を試みた。

○授業構想の工夫

新たなよさや美しさなどを発想・構想し，よりよい表現方法を駆使したり，価値意識をもった見方を深めるために，学習活動は習得したことを活用し，活用の中からさらに習得をするといった，その制作における思考の跡や表現のためのプロセスを大切にすることで学習の定着を確実なものにできると考え，具体的には

・生徒にどのような力を身につけるのか

・試行錯誤に十分な時間を確保する

・五感を活用したイメージの表出

・段階を踏んだ課題の達成

・他教科との連携・協力

・習得したことを活用させる意図的な場面設定

・得意な部分を追求する課題

・個人内評価のための生徒理解

などを様々に構成し，融合させて工夫した。授業内で扱った《粘土クロッキー》は生徒が頭に浮かんだイメージやアイデアを構想する際に，試行錯誤を繰り返すことで自分自身の表現したいイメージを表出させるために効果的だった。

粘土クロッキーでイメージをかたちにする

自分の印象を大切に，粘土により立体的にスケッチする

また，主題や目的をより明確にするとともに，よりよく美しくするために自らの表現を見直しながら見通しをもって追求したり，新しい価値を見いだそうと広く豊かに鑑賞しようとするなど，愛着とこだわりを大切に授業を構想した。そのために，学習活動内での指導と評価の一体化を確実なものにしていくために指導と評価の計画を立て，確実に定着させ次の指導に生かす評価を心がけた。さらに，生徒自身による制作

の見通しや自己評価力を高めるために評価規準の提示とステップアップにむけたヒントやアドバイスを明記した「制作の道しるべ」を活用した。

3学年　美術　制作の道しるべ

題　材：「いのりのかたち」（表現）　　3年　組　番　氏名

題材目標：日本の美術のよさや美しさに気づきその技と精神性にふれ理解を深めていくとともに感じ取ったことを基に，自分なりの主題を生み出す。

題材名	めざす目標	観点と評価規準	○	A	○	B	ステップアップのためのヒント・アドバイス
いのりのかたち	日本の美術や伝統文化に関心をもち，その比較検討を通した特徴や違いの発見から，日本人の精神性や文化の様子と自己への関心をさかめる。 材料や用具から見想を広げ，自分の主題が楽しく表現できるようしっかり構想を練る。 木のもつ特質を理解し，表現方法を工夫して表現しようとする。	美術への関心・意欲・態度 ★型紙や図様などのものの世界などを表現することに関心をもち，主体的に主題をさみ出し構想を練ろうとしている。 ★材料や用具の特性など多様的に生かし，表現方法を工夫して表現しようとしている。 ★形や色彩などの特徴や印象などから内面や全体の感じ，雰囲気の情緒などをとらえることに関心をもち，主体的によく学ぼうとし，作者の心情や表現上の意図や表現の工夫などを感じ取ろうとしている。		①対に着目してテーマ（題意・表現・意図）追求のための豊かな発想や新な視点から思考力に表現を構想している。 ②表現意図（人に伝えたいメッセージ）を効果的にあらわすのに，木材の生かし方を最適工夫しながら，常に意識して創造的に制作している。 ③造形作品を読み解くためのてがかりを見つけようとして，気ながに作品を見たり話し合いに参加したりしている。 ④目標や内容を把握にとらえ，材料，制作用具などを見たりと準備し，大切に扱うことができる。 ⑤発表し合うことで自分に見直しをもった制作を行い，作品などの鑑賞活動を行うことができる。		①テーマ（題意・表現・意図・等）を自分なりに考え，よい表現をしようとしている。 ②表現意図（人に伝えたいメッセージ）にあう木材の生かし方を，最適工夫しながら表現している。 ③造形作品のよさや制作の手だてなどを見つけようとしている。 ④目標や内容をとらえ，材料，制作用具などを準備し，学習に取り組むことができる。 ⑤発表し合うことで制作し，作品などの鑑賞活動を行うことができる。	【B】にステップアップするために →B　プリントを読み返し，準備や制作手順について正しく理解しよう。 →B　アイデアスケッチに発想のもとがある。次はどんどん描いてみよう。 →B　同じポーズをした仏像を資料集などで見つけてみよう。手の表情には意味がある。 →B　様々な感情を表現した仏像の顔の表情にも注目してみよう。 →B　大きな特徴として捉え，面の向いている方向や角度を観察しよう。

制作の道しるべ（部分）

③　考察及び成果と課題

構想した７つの題材のうち，２１年度は《第２学年　うるわし　伝統的な文化　つくる活動＋鑑賞伝統工芸「日本の美　世界の用」》の内容を取り上げ，２２年度は《第３学年　うつろい　伝統文化　つくる活動＋鑑賞　仏教美術　「いのりのかたち」》を段階的なつながりを意識して実践を行った。

・アンケート結果から，我が国の美術や伝統と文化に興味や関心を持ち始めたという意見が数多く見られ，生徒の心情に変化が現れ出した。
・デザインや配色の中に日本の伝統色を意識した色使いや形を取り入れようとする生徒が増え始め，日本のよさを感受し，表現に活かそうとする態度がみられる。
・各学年の授業総時数を考慮し，授業形態の工夫により，これまでの題材を効果的に活用する視点がさらに，必要である。
・３年間の指導計画において全領域のバランスのとれた配列にさらなる工夫が必要である。

我が国の美術や伝統と文化　学習計画試案

第１学年

◎におい　　生活に関わる文化（衣文化）デザイン④

描く活動＋鑑賞　『あさきゆめみし』　日本の伝統色（配色）を探ろう

※古典文学に登場する人物の衣装に着目し，日本的な色やかたち（模様）を意識させる

第２学年

◎もてなし　　生活に関わる文化（食文化）デザイン⑦

描く活動＋鑑賞　『函館べんとう』　～函館PR作戦～

※地域のよさや特徴を生かしたオリジナルの駅弁を考案し，そのパッケージを考え，今の生活文化を見つめ直す

◎うるわし　　伝統的な文化　（伝統工芸）工芸⑩

つくる活動＋鑑賞　　『日本の美　世界の用』

～和紙を使って帽子の制作～

※素材（和紙）のもつ特徴を実感させ，造形表現を生かして，形体と色彩，模様の効果的な扱い方を考える

◎おかし　　あたらしい文化（アニメーション）鑑賞①

鑑　賞　　『青い衣の少女』　～日本のアニメーション～

※アニメーションの原理から，造形を中心に，現代の美術文化を学ぶ

第３学年

◎しつらい　　生活に関わる文化（住文化）鑑賞①

鑑　賞　『茶室』　～取り合わせの中に秘められた趣向～

※日本人のもつ美意識を茶室の鑑賞から感じとり，簡素で質素なわび・さびの世界観を考える

◎うつろい　　伝統的な文化（仏教彫刻）彫刻⑯

つくる活動＋鑑賞　『いのりのかたち』

※仏教彫刻の表現から，微細な表現へのこだわりや内面的な美しさを感じとり造形的な美しさと精神的な豊かさを理解する

◎よそおい　　あたらしい文化（ファッション）工芸⑩

つくる活動＋鑑賞　『ジャパンコレクション』　和紙を使って

《共同制作》

※素材のもつ特徴を実感し，日本の美意識を現代に生かして，どう発信していくかを模索する

題材配列の工夫

〈第１学年における我が国の美術や伝統と文化に対する題材の開発〉

①　研究の重点

新学習指導要領の第１学年に新たに示された美術文化に関する学習について，鑑賞の授業を通じて，そのよさや美しさなどを感じとるとともに，美術文化に対する関心を高めることに焦点を当てて題材開発を行った。

②　具体的な取組

《第１学年 におい　生活に関わる文化（衣文化）デザイン　描く活動＋鑑賞　》

『あさきゆめみし』日本の伝統色（配色）を探ろう

国語科で扱う古典文学「源氏物語」は高等学校での扱いとなるが，登場人物のキャラクターが豊かに表現され，日本独自の精神性が見事に描かれている作品である。題材名にある『あさきゆめみし』は，源氏物語を題材にした，漫画家，大和和紀の代表作である。この作品を活用し，第１学年における美術文化に対する導入として漫画という素材から，生徒の興味や関心を引き出し，第２学年で扱う《おかし あたらしい文化（アニメーション)》へと接続させていく。

本題材は，源氏物語の登場人物の内面性や季節における着物のあわせ，伝統的な遊びに触れながら，人物たちがまとう衣装に着目し，日本の伝統色や日本独自の模様を組み合わせながら着物デザインを完成させるものである。日本らしさとは何かに気づかせていく内容である。

③　考察及び成果と課題

年度初めに行った事前調査では我が国の美術の特徴を表すキーワードを上げさせたところ富士山や屏風，能面，といった象徴的なものが多く出された。また，その印象としては堅く暗いイメージや高い壁のようなものを感じていることがわかった。しかし，今回の実践を終え，生徒の意見の中に意外と当時の人達はおしゃれな印象を持てた。動物や植物をモチーフにしたかわいらしい模様や，みたことのあった模様が伝統的なかたちだったことを始めて知った。赤い色でもたくさんの色がありその１つ１つに名前が付いていることに興味を持った。という意見が出された。また，ワークシートや掲示物の中に和風な配色を取り入れたものがみられ始めるなど，生徒たちが今風の感覚として取り入れ始めている様子が感じられる。

今後の課題としては，興味や関心を今後も継続させ，さらに，知識の面だけではなく美意識の面を同時に育んでいくことが必要であると考える。

(2)　言語活動に着目した指導

①　研究の重点

言語活動のカテゴリー化と「言語に関する能力の習得と活用一覧」の作成

他教科とのかかわりをもてるよう授業の展開の中に言語活動を意識した場面を取り入れ，年間指導計画を見直した。

鑑賞の授業構想

言葉の貧弱さが考え方や感じ方をも貧弱にさせていることを推測し，語彙の定着と豊かな表現力を高める工夫した。

②　具体的な取組

○言語活動のカテゴリー化と「言語に関する能力の習得と活用一覧」の作成。

・言語活動を【感受・表現】,【収集・整理】,【記録・伝達】,【解釈・説明】,【評価・論述】,【構想・実践】,【討論・協同】の７項目に分類し，学校研究のもと全教科を貫く共通の活用一覧表を作成した。美術科として他教科とかかわりをもてるよう授業の展開の中に言語活動を意識した場面を取り入れ,年間指導計画を見直した。

○鑑賞の授業構想

キーワード・ポイントの提示

・題材の全体像や創造のためのイメージが連想されるようなキーワード・ポイントの提示をすることを意図的に行った。

「制作のあしあと」の取組

・イメージの深化や豊かな表現力を期待し

て，「制作のあしあと」（個人内評価）を毎時間の授業の終わりに記入させた。

イメージ素材の活用

・【討論・協同】の活動を行う場面で，他者とのイメージの共有を図ることを目的として《イメージ素材》を活用した。

・イメージを言語化させる際に五感を媒体にするような《イメージ素材》（言語　素材写真など）を多数用意し，自分の感性に近い素材を選択させ，そこから「なぜ，それを選択したのか」という意味づけや自分の感性の情報を引き出すという手法で，イメージの共有を図った。

③　考察及び成果と課題

・単に「言語活動」という括りで実践していくのではなく，何に関する言語活動なのかを意識し，計画することで，生徒に身に付けさせたい力に直接働きかけるような学習活動を構想することができた。

・【記録・伝達】【討論・協同】の活動では要点をとらえる力を高めることができた。

・イメージ素材の活用は，生徒自身も自覚していない思考や表現しきれない感情を確かめるうえで，生徒同士のイメージの共有に役立ち自らのイメージを深化させることに有効だった。

・教科間を貫いて共通に用いることができる言語に関する能力を生徒自身が意識し，日々の学習の中で活用していくことにはまだ課題がある。

３　研究の成果と課題

第２学年，第３学年の接続を考えて取り組んだ２つの実践を終え生徒に再び，我が国の美術の特徴を問う質問をしたところ多くの生徒からあげられたものは，厳かな緊張感，繊細な感覚，簡素ななかの華やかさ，調和のとれた一体感といった美意識に迫る解答が目立った。また，制作においても，作品に対する細部にわたるこだわりや，丁寧な彩色の仕方，道具を大切に扱う態度などが見受けられるようになり，受け継がれてきた日本のよさや，精神性を重んじる感性など日本の美術に対する尊重の念が感じられる。これらの点から，日本人としての誇りや感性の奥深さに興味や関心を持ち始めているという点においても有効に働いたといえる。

また，題材における評価規準を見直し，生徒自身が自己評価力を高めていくための『制作の道しるべ』の活用は，教師も生徒も題材における目標をしっかりとおさえ，生徒への求める資質や能力を明確にイメージする上で有効に働いた。さらに完成した自分の作品に達成感や満足感を感じる生徒が増え，自分が表現したかった思いが形になっていくことへの楽しさと，作品を通じて伝えたい思いが相手に伝わるここちよさを感じることができていた。結果，美術に対する興味や関心，意欲における生徒の意識水準が上がった。また，一人一人の生徒が主題を追求するために授業内での対話が増え，お互いのイメージや意志の交流が盛んに行われた。

課題としては，時間の経過とともに身につけた知識や感覚は低下していることを考えると美意識の深いところまでの理解や感性の高まりには時間が必要であることが見えてきた。このことから継続的な取組で意識のレベルを下げない工夫が求められる。

・改めて他国の美と違う点，日本にしかない点に気づいた。

・ 西洋の文化と比べてみたときに，日本には丁寧さや繊細さなどのよさがあり，日本人として大切にしていきたいと感じた。

・美術館に行って，他の国の美や文化についても，もっと考えてみたくなった。

・ 改めて考えてみると，『ものや文化を大切にする』ということはとてもよい日本の誇れるところだと思います。だから，そういつた文化を大切にしていきたい。

生徒の感想：『制作のあしあと』より

平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

ふりがな	こくりつさいたまだいがくきょういくがくぶふぞくちゅうがっこう
学校名	国立埼玉大学教育学部附属中学校

校 長 名：大保木　輝雄

所 在 地：埼玉県さいたま市南区別所４－２－５

電話番号：048-862-2214

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	中学校美術

≪研究主題≫

育成する資質や能力を明確にした美術科学習指導法の工夫と改善

【研究の要点】

○美術の指導で育成する資質や能力の整理をした。

① 美術の指導で育成する資質や能力の整理

美術の指導で育成する資質や能力を，指導と評価の一体化の考えから，美術における評価の観点としてとらえ，学力の三要素との関係を踏まえて図に整理した。

（※美術における評価の観点と学力の三要素の関係図参照）

② 育成する資質や能力を明確にした表現と鑑賞の実践

ア A表現(1)(3)

感じ取ったことや考えたことの表現の授業実践

題材名「私は考える人」（第1学年）

「発想や構想の能力」を高めるために，題材の提案とアイデアスケッチの工夫をした。提案では，ロダンの「考える人」と自分たちの考える姿を比較しながら，表されたしぐさとの深い関係を理解させ，アイデアスケッチとして構想を練ることの重要さを感じることができるようにした。

「創造的な技能」を高めるために，しぐさの違いにより受ける印象の違いが感じられる資料提示や，アイデアスケッチを傍らに置いてイメージの実現状況を確認する制作活動ができるように指導を行った。

イ A表現(2)(3)

目的や条件の表現の授業実践

題材名「世界に一つの個性あふれるトートバッグ」

（第2学年）

「発想や構想の能力」を高めるために，提案では，実際に新聞紙によるトートバッグ作りの体験を通じて，新聞紙であってもトートバッグの目的や条件を満たすことができることを理解させ，形，色彩，材料を工夫するアイデアスケッチを行うようにした。

「創造的な技能」を高めるために，適時に優れた具体的な，形や色彩や材料の工夫がある参考作品の鑑賞をするとともに，アイデアスケッチを傍らに置いてイメージの実現状況を確認する制作活動ができるように指導を行った。

ウ B鑑賞の授業実践

題材名「本田貴侶先生の彫刻を鑑賞しよう」

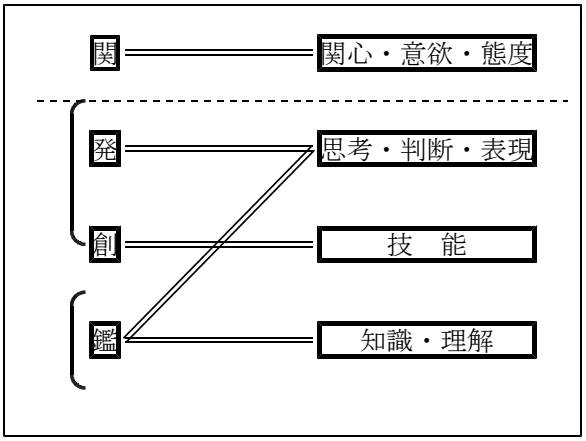
（第3学年）

「鑑賞の能力」の知識・理解の視点では，立体作品の見方や作者の思いなどを知り，より一層の理解ができるようにした。思考・判断・表現の視点では，作品を味わう実体験を重視するとともに，自分が感じたことはすべて真実であることを強調して指導した。自分の価値意識，美意識を高めることができるようにした。

○美術の学習活動と，育成する資質や能力を明確にすることによって，具体的な働きかけがしやすくなった。また，生徒の活動も充実するようになった。

○どの活動においても〔共通事項〕の指導をすることが，美術ならではの指導をする上で，極めて重要な資質や能力であることがわかった。

○育成する資質や能力を適切に把握することと，言語活動の充実を図ることには，発想や構想したことや，感じたり考えたりしたことを言葉や文章で表すことが有効であることがわかった。



※美術における評価の観点と学力の三要素の関係図

Ⅰ　研究指定校の概要

1　学校・地域の特色及び実態

本校は，昭和22年に埼玉師範学校附属中学校として開校，同26年に埼玉大学教育学部附属中学校と改称，同30年に現在のさいたま市南区に移転し今日に至る。そのような経緯もあり，本校は埼玉大学教育学部の附属の学校として大学との連携を図りつつ，教育の理論と実践に関する研究と教育学部生の実習を使命としている。

教育目標としては「正しい判断力とたくましい実践力をもった自主的人間の育成」を掲げ，日々の教育活動に取り組んでいる。学級数は各学年４学級の全12学級。附属小学校からの連絡進学生徒,受験により進学した生徒,帰国子女生徒が在籍する。

2　学校の概要（平成22年4月5日現在）

	1年	2年	3年	計
学級数	4	4	4	12
生徒数	167	174	174	515

教員数　28　名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

1　研究主題等

(1) 研究主題

育成する資質や能力を明確にした美術科学習指導法の工夫と改善

(2) 研究主題設定の理由

新学習指導要領は,構成や内容が整理され,各学習内容において，育成する資質や能力をより一層明確にして指導することの大切さを示している。また,〔共通事項〕の考えは,各学習内容や小学校・中学校の校種を通じて共通して働く資質や能力を育成することの大切さを示している。本校では，これらを踏まえた美術科指導を行うことが，美術科学習指導の工夫と改善につながるものと思い研究主題を設定した。

(3) 取組体制

校長→副校長→校内教頭・主幹教諭→研究部→美術科の連携体制を組み，学校全体で研究に取り組んでいる。また，本校独自の教育研究を行い，昨年度より「新学習指導要領に基づく学習指導要領の改善」に取り組んでいる。

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	4月	○研究計画の作成
		○本校の生徒の分析
	5月	○研究授業Ⅰ（研究方針・計画の提案）
		※本校研究協議会での授業提案
	6月	○「育成する資質や能力」の研究
	8月	○先行実践等の取材，研究会への参加
		※夏期研修会等への参加
	9月	○研究成果を生かした授業改善と実施
	11月	○先行実践等の取材，研究会への参加
	12月	○研究授業Ⅱ　※指導者は教科調査官
		○中間報告書の作成
	2月	○研究協議会での発表
		※国立教育政策研究所による開催
		○一年次の反省と次年度に向けての課題整理
平成22年度	4月	○研究計画の修正・作成
		○本校の生徒の分析
	5月	○研究授業Ⅰ（研究方針・計画の提案）
		※本校研究協議会での授業提案
	6月	○「育成する資質や能力」の研究
	8月	○先行実践等の取材，研究会への参加
		※夏期研修会等への参加
	9月	○研究成果を生かした授業改善と実施
	10月	○研究授業Ⅱ　※指導者は教科調査官
		○最終報告書の作成
	1月	○研究協議会での発表
		※国立教育政策研究所による開催
		○来年度の研究計画の作成

2　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究の重点

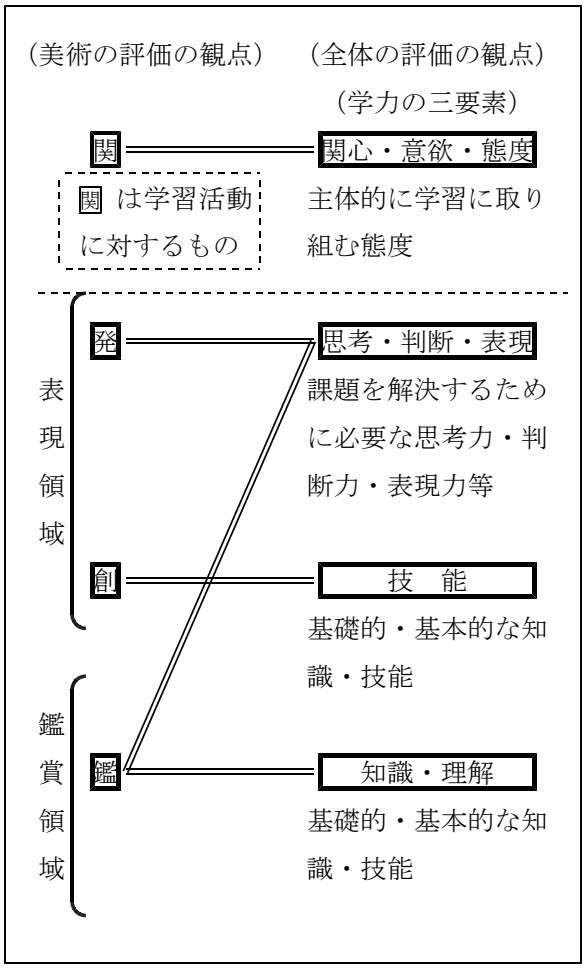
① 美術の指導で育成する資質や能力の整理を行うとともに〔共通事項〕との関連を明らかにする。

② 育成する資質や能力を明確にした表現と鑑賞の授業実践と検証を行う。

③ 育成する資質や能力を踏まえた３年間の指導計画の研究

(2) 具体的な取組

① 美術の指導で育成する資質や能力の整理



「美術への関心・意欲・態度」は，学習活動に対する主体的な態度なので，常に学習活動と組み合わせてとらえるようにする。

「発想や構想の能力」は，表現活動における思考力，判断力，表現力等としてとらえ，作品の主題を決めたり，どのような作品にするかを具体的に考える時に発揮される資質や能力として扱う。

「創造的な技能」は，表現活動における技能としてとらえるが，自分の表現意図が実現するための，材料や用具，表現方法の工夫等を創造的に行う資質や能力として扱う。

「鑑賞の能力」は，造形的なよさや美しさを感じ取り，知識等を活用しながら思考判断し，自分の価値意識をもって美術作品や美術文化などを幅広く味わう資質や能力として扱う。

どの活動においても〔共通事項〕の指導をすることが，美術の指導をする上で，極めて重要な資質や能力であることがわかった。

② 育成する資質や能力を明確にした表現と鑑賞の授業実践

Ａ表現(1)(3)感じ取ったことや考えたことの表現の授業実践
題材名「私は考える人」（第１学年）

1．題材の目標

自分の考える姿に関心をもち，考えている内容と心情，その時の具体的で細かなしぐさのイメージを，形と色彩の造形的な効果，粘土の特性を生かして立体に表現する

2．題材の概要

本題材は，自分の日常生活の考える行為としぐさを振り返り，最も表したい考える姿を芯材を使った粘土で立体に表す題材である。感じ取

ったことや考えたことを明確にするために，発想や構想を絵と文字のアイデアスケッチにまとめ，それが実現できるように，表現に必要な材料や用具の使い方を指導した。

3．育成する資質や能力を高める工夫

「発想や構想の能力」を高めるために，題材の提案とアイデアスケッチの工夫をした。提案では，ロダンの「考える人」と自分たちの考える姿を比較しながら，表されたしぐさとの深い関係を理解させ，アイデアスケッチとして構想を練ることの重要さを感じることができるようにした。

「創造的な技能」を高めるために，しぐさの違いにより受ける印象の違いが感じられる資料提示や，アイデアスケッチを傍らに置いてイメージの実現状況を確認する制作活動ができるように指導を行った。

4．成果と課題

感じ取ったこと，考えたことを大切にして制作を行ったことで，生徒も力を入れるところがよくわかり，作品の多様性をより一層発揮させることができた。

課題としては，発想や構想したことを，制作を進めているうちに変更したくなる生徒が多く見られた。制作は発想や構想を深め，改善点に気付くプロセスとしてとらえること，途中からの発想等の変更にも対応できるような題材の在り方を今後検討していきたい。

A表現(2)(3)目的や条件の表現の授業実践
「世界に一つの個性あふれるトートバッグ」
（第２学年）

1．題材の目標

トートバッグの用途や機能を踏まえたデザインに関心を持ち，使用するものの気持ちや材料などから，形や色彩の造形的な効果を生かして自分ならではのトートバッグとして表現する

2．題材の概要

本題材は，自分ならではのトートバッグをイメージして，それに必要な材料を用意し，形や色彩，用意した材料の特性等を工夫して表す題材である。用途や機能を踏まえた上での造形の工夫ができるように，アイデアスケッチを充実させ，その内容をよく参照しながら制作を進めるようにした。

3．育成する資質や能力を高める工夫

「発想や構想の能力」を高めるために，提案では，実際に新聞紙によるトートバッグ作りの体験を通じて，新聞紙であってもトートバッグの目的や条件を満たすことができることを理解させ，形，色彩，材料を工夫するアイデアスケッチを行うようにした。

「創造的な技能」を高めるために，適時に優れた具体的な，形や色彩や材料の工夫がある参考作品の鑑賞をするとともに，アイデアスケッチを傍らに置いてイメージの実現状況を確認する制作活動ができるように指導を行った。

4．成果と課題

目的や機能を前面に出し過ぎると，発想を萎縮させてしまうことがわかった。課題の与え方の工夫が必要である。結果としては「発想や構想の能力」は発揮されたが，内容的には結果としてA表現（1）に近い内容になってしまった。指導内容に応じた資質や能力を確認していく必要がある。

Ｂ鑑賞の授業実践
「本田貴侶先生の彫刻を鑑賞しよう」
（第３学年）

1．題材の目標

彫刻作品の造形的なよさや美しさに関心をもつとともに，対象のイメージ，作者の心情や意図と表現の工夫，主題と表現技法の選択や材料の生かし方などを感じ取り，自分の思いや考えをもって味わう

2．題材の概要

鑑賞した作品１
（左）

鑑賞した作品２
（右）
鑑賞した作品３
（下）

いろいろな視点で見ること，手触りも確かめることなどの彫刻作品ならではの事前指導を行ったうえで，本校にゆかりのある作家である本田貴侶の作品を，対象から感じるイメージや造形的な特徴に注目して味わう。グループ活動やワークシートを活用して，感じたこと，思ったこと，考えたことが深まるようにした。

3．育成する資質や能力を高める工夫

「鑑賞の能力」の知識・理解の視点では，立体作品の見方や作者の思いなどを知り，より一層の理解ができるようにした。思考・判断・表現の視点では，作品を味わう実体験を重視するとともに，自分が感じたことはすべて真実であることを強調して指導した。自分の価値意識，美意識を高めることができるようにした。

4．成果と課題

実物の作品は，そこに在るだけで生徒の感性を刺激する力があることがわかった。その力を美術科の目標と育成する資質や能力に応じて上手に生かすことが大きな課題である。

３　研究の成果と課題

育成する資質や能力を整理し，ねらい，指導内容，評価内容を一本化することが，指導の成果を上げるのに有効であることが，実践からわかった。このとき，育成する資質や能力は，それぞれの活動の顕著なものとしてとらえることが重要であると考える。ただし，具体的な指導では，指導は重点化するものの，発揮される資質や能力には，幅広く読み取ることが必要である。学習評価との関連も含め，今後とも研究を進めていきたいと考える。